

配慮の機能を持つ副詞についての一考察

——「そこそこ」を中心に——

鈴木夕佳（創価大学）

要 旨

「そこそこ」は本来、「ほどほど」とほぼ同程度とされる中程度の副詞であるが、《自賛》の際、その程度を抑制するために使用されていると考えられる。結論として、「そこそこ」には、「少ない」「十分でない」などの客観的なマイナスの側面と、「満足できる程度」「思っていたより良い」などの主観的なプラスの側面とが相反する形で混在しており、意味があいまいで主観的であるといえる。そのため、否定型の謙遜表現とは違い、謙遜しつつも、ある程度自身を認めるといったニュアンスが含まれることがわかった。

キーワード：配慮機能、副詞、そこそこ、発話機能、自賛

1. はじめに

本稿では、配慮表現の観点から、日本語の「そこそこ」という副詞のもつ配慮機能について考察する。「そこそこ」は本来、「少ないが、満足できる程度」という意味を持つ中程度の副詞である。本稿では、その「そこそこ」が、《自賛》の程度を抑制するために使用されていると考える。

《自賛》とは、発話機能（山岡（2008）・山岡他（2010））の分類に基づいたもので、本稿では、その目的を、自身についての肯定的評価を相手に伝えることと規定する。

ポライトネスの原理を提唱した Leech（1983）が謙遜の原則を挙げているとおり、人は自身を褒めるような言語行動をとることに抵抗を感じるため、できるだけそれを最小限にしようとする傾向がある。つまり、《自賛》をする際に、なるべくその《自賛》の程度を抑制しようと試みるはずであり、その際に用いられる様々なストラテジーのうちの一つが「そこそこ」という副詞であると考えられる。

以下、発話機能論に基づいて、《自賛》がどのような語用論的条件を持ち、また、どのような文脈で使用されているかを分析する。そして、《自賛》を「そこそこ」がどのように抑制しているのか等、「そこそこ」の配慮機能について分析する。

2. 「そこそこ」の用法

『明鏡国語辞典 第二版』（2011）によると、「そこそこ」には以下の三つの用法が存在している。

- ① あることを十分に終えないうちに急いで次のことをするさま。
- ② 十分ではないが一応満足できる程度であるさま。
- ③ （数量を表す語について）…くらい。

本稿で論じる「そこそこ」は、②の程度副詞用法によるものである。また、『日本語表現・文型事典』（2002）には、以下のように記されている。

・分量表現

ソコソコ・マアママはジュウブンとまではいかないが、困らないくらいのレベル、つまり、ある程度は満たしているというような場合に用いられる。

ソコソコは、思っていたより案外いい、マアママはよいとまではいかないが少なくとも悪くない、という含意がある。

以上が、「そこそこ」の一般的な用法である。

3. 問題提起

Leech (1983) の謙遜の原則にあるとおり、人はなるべく自己への賞賛を最小限にしようとしているものである。この原則を無視すると、「嫌味」だとか「傲慢」などのマイナス評価につながりやすく、対人コミュニケーションの上で非常に不利となってしまう。

しかし、自身の成功や誇りに思っていることを他者に伝えたいという欲求は、人として避けられないものである。また、聞き手から何らかの問いかけがあった場合、また、文脈上そのことに触れる必要がある場合などには、自身の肯定的評価についてある程度言及しなければならないこともあるだろう。

そこで、「そこそこ」は、《自賛》を行わなければならない際に、その程度を抑制するためのストラテジーとして使用されており、一種の配慮的機能を持つと考えられる。そして、その働きとは、謙遜しつつ、かつ自身の肯定的評価を伝えるということである。以上を前提として、これから例文をもとに考察を進める。

4. 《自賛》における「そこそこ」

「そこそこ」の配慮機能の大きな特徴として、《自賛》の抑制がある。本稿では、山岡他(2010)の《賞賛》の定義を元に、《自賛》を以下のように規定する。

《自賛》

目的：参与者 B が、自身についての肯定的評価を参与者 A に伝えること

語用論的条件：共通①に加え、

③当該命題は参与者 B またはその所有物に関するものであること

④参与者 B が述べる当該命題は、参与者 B 自身にとって望ましいものであること

《自賛》であるかどうかという判断については、以上の語用論的条件を満たしているか否かによって判断する。つまり、実際に感謝をしていなくとも、「ありがとう」といえば《感謝》の目的を果たすように、自賛するという意図がなくても、自身の肯定的評価を伝えているものであれば、その発話を《自賛》とみなすことにする。つまり、意図的に自身の肯定的評価を相手に伝える“自慢”と《自賛》はイコールではなく、《自賛》の中に“自慢”が含まれると考える。

また、本稿では、《自賛》は、《陳述》、《主張》、《反論》、《承認》などのさまざまな発話機能に重複して現れるものという前提で論を進める。つまり、《自賛》は、ある別の目的を遂行するために、二次的に必要とされるものという位置づけである。この点については、以下の例を踏まえて説明する。

- (a) (あるオフィスに、中国の取引先から電話がかかる。対応した者は中国語がわからないため、オフィスにいる社員達に呼びかける)

「この中に中国語ができる人はいますか?」「そこそこできます」

(筆者による作例)

この「そこそこできます」という《自賛》は、話し手がはじめから《自賛》しようと思図してなされたものではなく、中国語ができることを示さなければならないという状況下で、いわば必要に迫られてなされたものである。つまり、相手の《陳述要求》に対して《陳述》するという行為に、《自賛》という行為が付带的に付いているということになる。

このように、一つの発話に一つの発話機能というわけではなく、発話はその目的によっていくつかの機能を持つといえる。

4.1. 《陳述》における《自賛》

以下の2例は《陳述》において《自賛》が現れているものである。《陳述》の場合、その目的である「世界の現象を命題として述べること」(山岡他(2010:132))という内の「世界の現象」を、そのまま「自身の肯定的評価」と言い換えることができるため、《自賛》は《陳述》に、ほぼ全面的に同化することができるといえる。

- (1) 私は隣町にある、そこそこ有名な洋食屋の娘だった。どのくらいかと言うと、観光のガイドブックにはいつでも載るし、家族でちょっと外食しようか、とか、独身サラリーマンが今日はちょっと奮発して外でごはんを食べて帰るか、でもフランス料理ほど奮発したくないな、というような時に寄っていくような感じの店だった。

(『デッドエンドの思い出』よしもとばなな)

(1) では、語り手が自身の家族の店を「そこそ有名」とし、その具体的な程度を続けて述べている。「私は隣町にある、とても有名な洋食屋の娘」など、高程度の副詞がついている場合の《自賛》の程度が甚だしいことはいまでもないが、「私は隣町にある、有名な洋食屋の娘」など、程度の副詞がついていない場合でも、《自賛》となることは確実である。これは、「有名」という語彙そのものに肯定的意味が含まれているからである。つまり、「そこそこ」という程度副詞によってその度合いを限定することではじめて、《自賛》の程度が抑制されるといえる。

よって、「そこそこ」には、

- 一、 語彙の持つ肯定的意味を限定することで謙遜の意を表し、その《自賛》の程度を抑制する

という働きがあると考えられる。

- (2) 俺は、勉強もそこそこ出来て、運動神経も良く、今は世間で評価されているような大学に通ってます。(自慢ではないです。)しかし、僕には、「これは他の人には絶対に負けない！」って事ありません。

(「MSN相談箱」より)

(2) の話し手の実際の能力がどのくらいかということはよくわからないが、「世間で評価されている大学」に入っており、「運動神経も」良いと続けていることから、この発話が

《自賛》であることがわかる。

話し手の悩みは、単に、他人に負けないようなものが自分にはないというだけでなく、いくつかの優れている面を持ってはいるが、それに満足できていないという要素もその一部となっているため、より正直に悩みを吐露しようと思えば《自賛》は不可避である。また、話し手が進んで《自賛》を行っていないことは、わざわざ「自慢ではない」と付け加えていることから推し量ることができる。

つまり、悩みを打ち明けるという目的において、その悩みをより正直に告白するために、《自賛》が付帯的に使用されていると考えられる。

4.2. 《主張》／《反論》における《自賛》

以下に示す例は、《主張》および《反論》において《自賛》が現れているものである。《主張》・《反論》の目的は、「世界の現象に対する参加者の見解を述べること」(山岡他(2010:132))であるが、この「参加者の見解」に《自賛》が含まれているものと捉える。

4.2.1. 《主張》における《自賛》

以下の(3)は、インタビューにおける《主張》の例である。インタビューは、その性質上、ある程度自身の見解をより詳しく述べるのが求められるので、普通の会話よりも《自賛》が現れやすいのではないかと考えられる。謙遜ばかりで、本音が見えないようなインタビューではかえってつまらないだろう。つまり、《主張》においても、(2)と同じように、自身のより正直で率直な見解を述べるため、《自賛》が付帯的に使用されていると考えられる。

(3) 8年前、女子ソフト部の監督の話があったときは迷った。野球でそこそこやってきたという自負があったし、ソフトはレクリエーション、の認識だった。

(毎日 News パックより 見出し:「じっくりとっくり」細淵守男氏)

(3)は、「やる」という動詞が「そこそこ」と修飾されることで、「野球の分野である程度の業績を残した」という意味の肯定的評価が付加されていると受け取れる。「自負」という言葉からも、話し手の誇りや自信が感じられ、「そこそこ」が付加されることによって、《自賛》しつつ謙遜するという二重のベクトルの向いた表現となっている。

よって、「そこそこ」の配慮的機能の二つ目として、

二、 もともと《自賛》ではない文に、謙遜性を持たせつつ肯定的評価を付加し、《自賛》とする

というものを挙げるができる。

4.2.2. 《反論》における《自賛》

《反論》は、相手の意見に賛同できないことを主張する言語行動であるため、相手を不快にさせる危険性が高く、よりいっそう配慮も必要となってくる。配慮のストラテジーとしては、「あなたの言いたいこともわかるけど」、などの相手の立場に配慮した前置きや、「この点については賛成できるけど」、などの限定的な賛同をした上での反対意見の表明などが挙げられる。

(4)の例は、《反論》に《自賛》が付帯していることになるが、これは、相手から非難を受けた話し手が、自分の正当性を主張するために《自賛》を行ったと考えられる。つま

り、《自賛》そのものを行うことが第一の目的となっているわけではなく、反論するという目的のために《自賛》が用いられているということである。

(4) (日ソ関係を「窓際的」と批判した議員に対し)

外相　日ソ関係は窓際的というが、一九五六年の日ソ共同宣言で日本はソ連に最恵国待遇を与えている。G7の中でもいま、最恵国待遇にするかを論議している国もある。昨年までは六十億ドルの貿易量がある。ドイツ、フィンランド、イタリア、日本が（貿易量では）トップクラスだ。平和条約こそ結ばれていないが、日本はそこそこに努力していることを理解されたい。

(毎日 News パックより　見出し：衆院予算委—ソ連政変[中略]主なやりとり)

(4) は、「努力している」という肯定的意味を「そこそこ」と限定し、《自賛》を抑制している例であるが、本来、「努力」することそのものに肯定的意味はない。だが、一般的に、努力することは美德であるという社会的認識が存在するため肯定的意味と捉えられ、《自賛》につながると考えられる。

また、《反論》の話し手は当時、外務大臣という日本の対外関係事務を担当する機関のトップであり、日本の国際的な動向の責任は、一般的に、その政治的采配を振るう彼の責任であるという社会的認識が存在する。ゆえに、「そこそこ」が修飾する「努力する」の主語は「日本」となっているが、それは話し手自身の努力とほぼ同一と考えられる。

ところで、話し手の立場は公のものであり、その発言に対する注目度は、一般に比べて非常に高い。ゆえに、そういった立場にある者は自身の発言に慎重にならざるを得ず、はっきりとした表現を避けやすい傾向があると考えられる。そのため、主観的で、あいまい性のある「そこそこ」が使用されやすいのではないかと推測する。この「そこそこ」の主観性・あいまい性については6節にて述べることにする。

4.3. 《自賛》的《承認》

山岡他(2010)によると、《承認》は、《陳述》、《主張》、《反論》の属する{演述}ではなく{宣言}に属する発話機能である。ゆえに、{宣言}の一種である《承認》に{演述}の一種である《自賛》が含まれるとはいえないため、本章に紹介する《承認》を便宜的に自賛的《承認》とする。

(5) (滋子)「萩谷さんは事業家として成功していらっしゃる、敏子さんから伺っております」

相手はちょっとひるんだ。

(萩谷)「まあ、そこそこです」

(『樂園 上』宮部みゆき、括弧内筆者)

(5) の例は、滋子の発言に対して「そこそこだ」と返すことで、程度を抑制しつつも、自身の肯定的評価を認めているものである。状況としては、萩谷が、滋子のある行動について苦情を言いに来た場面である。この会話は萩谷が苦情を言った後のやりとりであるが、滋子は続けて、「そういう萩谷さんに、たとえばこれからお店を経営しようとか、会社を興そうという若い方が、相談に来ることはありませんか。そういうとき、アドバイスして差

し上げるものですね？」と述べ、苦情の原因となっている自分の行動もそれと同じだと説明している。つまり、滋子が萩谷の社会的成功について言及したことは、“自分がしていることに他意はない”ということを用いて説明するための便宜的な確認である。

また、実際に萩谷は、地元だけではなく都心にもレストランやスーパーを何軒も所有しているという設定になっており、「成功していらっしゃる」という発言に対する「そこそこです」という応答は、実際の程度よりも自身の肯定的評価を低く見積もっているという点で、謙遜と考えられる。

だが、謙遜表現という点から見ると、「そこそこ」には「そこそこ（成功している）」等、自己の肯定の意味合いが含まれるため、相手によっては、「あつかましい」という印象を与えかねない。この場合、萩谷は怒りのために攻撃的になっており、あまり謙遜を強く行わなかったとも考えられる。

以上の分析から、「そこそこ」の配慮的機能として以下のものが加えられる。

- 三、相手の発話に対する《承認》において、程度を抑制しつつも、自身の肯定的評価を認める

5. 《自賛》の抑制以外の「そこそこ」の配慮的機能

本節では、《自賛》の抑制以外の「そこそこ」の配慮的機能として、与益表現における負債の緩和を挙げる。以下、例文を使って説明する。

- (6) 「どうやら。今日はみなさんにちイと知恵かりたいんやが……（中略）いや、ただで知恵はかりまへん。アイデア採用となったら、そこそこのお礼はさせてもらいまっさ」

（小松左京コーパス『小説万国博』）

(6) は、聞き手に利益を与える発言である。姫野（1992）は、会話において聞き手が受益者となる場合、話し手が聞き手の心の負担にならないよう与える利益が少ないかのように表現することは、「思いやりの原則」に則っていると述べている。このことから鑑みると、(6) の発言は思いやりの原則に違反しているものとなる。だが、この場合、贈り物をする、客をもてなすなどの一方的な与益ではなく、良いアイデアを得ることの交換条件としての与益であり、聞き手の利益を少なく表現することによって、聞き手の話し手への与益行為を留まらせてしまう可能性もある。話し手の立場からすれば、自らの受益行為の見返りとして十分な利益を与えるつもりであり、そのことを聞き手にも伝えたい場合に、負債表現と謙遜表現との間隙をつくようにして「そこそこ」を使用していると考えられる。

このことから、「そこそこ」の配慮的機能として、以下のものを付け加えることができる。

- 四、相手の心の負担にならないように配慮しつつ、与益を表す

6. 「そこそこ」の配慮のメカニズム

本節では、「そこそこ」の意味組成から、その配慮のメカニズムについて分析する。以下の二つの用例は、同じ「そこそこ」という副詞を用いながらも、反対の意味を持つものである。

(7) ネット裏ではヤンキースにコーチ留学中の元日本ハム・白井一幸さんも見学し、「ブランクを考えれば、そこそこの球を投げていた。さすがに物が違う。米国でも成功すると思う」と太鼓判。

(毎日 News パックより 見出し：米大リーグ ヤンキースの伊良部秀輝投手が投球練習)

(8) 良い豆は多くは取れない。そうすると、どうしてもそこそこの品質のもので妥協しなくてはならなくなるのです。

(毎日 News パックより 見出し：「SAZACOFFEE」会長・鈴木誉志男さん)

(7) の例は、「さすが」や「太鼓判」という言葉からも窺えるように、どちらかというど好意的な意味で「そこそこ」が使用されている。一方、(8) の例は、「妥協」という言葉からも、否定的な意味で「そこそこ」が使用されているとわかる。

ここで「そこそこ」の意味組成に着目する。

「十分ではないが、一応満足できる程度であるさま」(『明鏡国語辞典 第二版』2011)

「ジュウブンとまではいかないが、(中略) 思っていたより案外いい」

(『日本語表現・文型辞典』2002)

まず、「そこそこ」の意味には、「十分ではない」「ジュウブンとまではいかない」(傍線)という客観的に捉えたマイナスの側面がある一方で、「一応満足できる程度」「思っていたより案外いい」(波線)という主観的に捉えたプラスの側面が相反する形で混在している。つまり、一つの意味の中に客観と主観双方の視点が存在し、かつ、いいのか悪いのか、意味があいまいなのである。つまり、「そこそこ」に、このようにあいまいで、主観的な要素があることが、配慮の働きにつながっていると考えられる。

また、(7) と (8) の例のように、「そこそこ」がプラス意味となったり、マイナス意味となったりするのは、「そこそこ」の意味組成の中に含まれる、二つの相反する意味を話し手が随意に選択し、文脈によって使い分けているためと考えられる。つまり、「そこそこ」の意味は文脈に依存し、その時々で意味のベクトルを変えるといえる。

7. おわりに

以上、「そこそこ」の配慮的機能について概観した。結果として、「そこそこ」には《自賛》の抑制機能と、与益表現における負債の緩和機能があることがわかった。

また、「そこそこ」の意味が主観的であいまいであることから、「そこそこです」というような謙遜表現には、否定型の謙遜表現とは違い、謙遜しつつも、ある程度自身を認めるというニュアンスが含まれることがわかった。

つまり、「そこそこ」には、自賛という上向きのベクトルと、謙遜という下向きのベクトルとを矛盾することなく表せるという特徴があり、この特徴は与益表現においても、相手に負債を与えないようにしつつ与益を示すという配慮に生かされているといえる。

参考文献

姫野伴子 (1992) 「負担と利益」『埼玉大学紀要人文科学篇』41 巻、埼玉大学教養部

山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』

明治書院

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.

用例出典

- 1 毎日新聞社「毎日 News パック」より
「衆院予算委一連政変、証券・金融不祥事など、主なやりとり」
(<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20110919193220197gsh-ap01>)
2011年9月19日参照
「米大リーグ ヤンキースの伊良部秀輝投手が投球練習」
(<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20110919193505174gsh-ap01>)
2011年9月19日参照
「『じっくりとっくり』細瀬守男」
(<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20110919193736981gsh-ap01>)
2011年9月19日参照
「『SAZACOFFEE』会長・鈴木誉志男さん」
(<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20110919193916295gsh-ap01>)
2011年9月19日参照
- 2 小松左京コーパスより
小松左京『小説万国博』
(<http://aci.soken.ac.jp/soars/DBLinkInfoForm.do?DB=BC010&uniquekey=105600&tagCode=BC010030&link=BC001&data=10560>), 2011年9月19日参照
- 3 小説より
宮部みゆき (2007) 『楽園 上』文藝春秋、289
よしもとばなな (2003) 『デッドエンドの思い出』文藝春秋、11
- 4 MSN 相談箱より
筆者不明「他人に負けないこと」 (<http://questionbox.jp.msn.com/qa558247.html>) 2011年9月19日参照
- 5 辞書より
「そこそこ」『日本語表現・文型辞典』(2002) 朝倉書店、357
「そこそこ」『明鏡国語辞典 第二版』(2011) 大修館書店、1000

(鈴木夕佳、創価大学教育・学習活動支援センター助教、syuuka@soka.ac.jp)